



創立1880年

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 日本キリスト教会館6階 Tel 03-6302-1960 URL http://tokyo.ymca.or.jp 発行所 公益財団法人 東京YMCA 発行人 菅谷 淳

東京YMCA 7・8

2023

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

ウクライナYMCA 「心のケア」に尽力

東京YMCAはウクライナYMCAと20年以上の交流があり、ロシアによる侵襲開始直後からウクライナ支援を続けています。これまでに、皆様からお預かりしたウクライナ支援募金5万ドルを送金しました。今回は、6月に行われた両YMCAによるミーティングで、ウクライナから報告された現地の近況やYMCAの活動についてお伝えします。

洪水被災者支援

6月6日、南部ヘルソン州のダムが決壊し、約70の町や村で大規模な洪水が発生。6月27日時点で水はほぼ引いています。が、貯水できないために水不足が続く、砂漠化や食料不足が生じる恐れがあります。ザポリージャYMCAは、洪水の避難者に対して宿泊施設、国内避難民としての登録支援、心理社会的サポートなどを行っています。

サマーキャンプ

東京YMCAからの支援により、今夏は①～⑥が実施されます。サマーキャンプ(①～④)は、子どもたちが精神的トラウマを克服し、気持ちを安定させることを目的とします。



洪水発生直後の救援活動の様子

①6～9歳のデイキャンプ。占領下にあった地域の子どもが参加。アートやスポーツなどを行う。

②4～7歳のキャンプ。ボランティアスタッフの子どもや国内避難民の子どもが参加。アートのプログラムを行う。

③7～12歳のキャンプ。国内避難民や地元の子どもが参加。ゲーム、心理学ワークショップや遠足などを行う。

④5～17歳のキャンプ。ウクライナ東部の大きな被害を受けた地域で実施。専門家により、犬と触れ合い心を癒すセラピーも行う。

⑤ファミリーキャンプ。山歩き、遠足、ゲームなど、大人と子どもの双方に合わせた活動を行う。

⑥キャンプリーダートレーニング。5月に実施。参加した40人以上のリーダーは、コミュニティに戻ってキャンプを実施している。

退役軍人の支援 戦争から帰還した退役軍人のメンタルヘルスや



犬と触れ合い心を癒すドッグセラピープログラム

生活への適応をサポートするプログラムや、アメリカの心理学者によるウクライナの心理学者へのトレーニングの準備が進められています。国外のYMCAには、プログラムへの協力や財政支援が求められます。

チームワーク 戦争の長期化により、ウクライナYMCAのスタッフ、ボランティア、キャンプリーダーは疲れしているものの、互いに気遣いながら活動を続けています。心理社会的サポートも受けています。

ウクライナのYMCAの力に 今回のミーティングの後、「インターナショナルデー」(113面)にウクライナYMCAのスタッフとユースがオンラインで参加しました。世界の「友だち」を思っ

た私たちの歌声と笑顔が

役員・評議員改選

公益財団法人東京YMCAは6月22日の「定時評議員会」で、理事・監事・評議員の改選を行いました。今期は4年に一度の評議員改選の年であり、5人の新任者を選出しました。YMCAの意思決定を担う方々です。新任者はプロフィールもご紹介します。

新任役員・評議員紹介

- ①職業 ②所属教会 ③YMCA関係

【理事】

柳原正人

- ①NECセキュリティ株式会社 ②日本基督教団弓町本郷教会 ③東京YMCAミッション委員

綿引康司

- ①多摩新興株式会社 ②日本基督教団八王子栄光教会 ③東京YMCA会員部運営委員長

【評議員】

佐渡加奈子

- ①認定NPO法人カタリバ ②東京YMCA杉並・山手センターメンバー・リーダーOG

篠田真紀子

- ①日本基督教団浅草教会牧師 ②日本基督教団浅草教会 ③東京YMCA会員

堀口廣司

- ①学校法人東京YMCA学院 学院長 ②日本基督教団早稲田教会 ③学校法人東京YMCA学院 職員

公益財団法人 東京YMCA 役員・評議員 一覧

【理事】(7名)

- 飯 靖子 石川 理 柳原正人* 綿引康司* 菅谷 淳(代表理事) 秋田正人(業務執行理事) 星野太郎(業務執行理事)

【監事】(2名)

- 伊藤幾夫 進藤重光

【評議員】(16名)

- 青山鉄兵 上田晶平 尾崎久美子 小原史奈子 上條直美 草分俊一 古賀 博 東矢高明 中内俊一郎 中村基信 西川嗣夫 長谷川康一 林 正人 佐渡加奈子* 篠田真紀子* 堀口廣司*

◇退任者(任期満了)◇

- 藏知 浩(理事) 神保正男(理事) 松下欽三(評議員) 桃井明男(評議員) 渡辺誠二(評議員)

赤三角

「決算を報告する際は、現場の職員がこれだけ頑張ったから、この収益がこのような上がりました」と伝えることが大切です。現場の方があなたの決算報告を聞いて、自分たちの働きが、決算をどのように良くしたのだな」と理解すること。それが、財務の仕事、決算の報告です。6月の理事会で決算報告をした際に、このたびの改選でご退任なさる理事にかけたいただいた言葉である。様々な場面で決算報告をする際に、常に注意を払っていたのは、わかりやすく伝える」ということであった。平易な表現に努め、とかく理解しづらい決算を正確に関係者に伝えること。それが決算の報告だと信じていた。しかし最奥に「職員の働きを決算の数値に繋げて伝える」という最も大切なことがあることを、理事に教えていただいた。▼決算書とは、無味乾燥な数字の羅列であってはならない。ともにある職員の働きをそこに重ね、働きが生み出した価値を関係者に伝えていきたい。それが、決算の報告だと信じている。▼ご指導いただいた理事に心より感謝し、かけていただいた励ましを心に深く刻み、これからも会員とともに歩んでまいります。

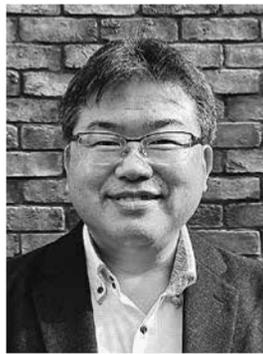
(財務部MD 古市 健)

YMCAからのメッセージ ①

新学期を迎えるあなたとご家族へ

あなたはあなたであっていい

変わり続ける社会の中でも揺らぐことのないYMCAの価値を、その時々メッセージとしてお届けします。



東京YMCA高等学院 学院長 井口 真

子どもたちが求める 真の居場所とは

時間をかけて 自分のペースで

学校でも基本的には同じことが起きています。「できる・できない」で評価され、ストレスに晒され続ける集団の中で、子どもたちは目立ち過ぎないようにアンテナを張るのです。もはや学校は厳しい社会に出るための準備機関です。こうした学校に、子どもたちは、学級崩壊、不良、ツッパリ、登校拒否や不登校、いじめ、家出、クソリ、望まない妊娠、少年犯罪...といった形で、何度もNO!と言ってきたのではないのでしょうか。あるいは、悲鳴なのかもしれません。

効率重視の自己責任社会へ

「機械化」「自動化」が進み、「成果主義」「非正規雇用」といった働き方や、ムラ社会のしがらみを逃れる核家族化など暮らし方にも影響していき、2021年度の不登校の小中学生の数で、過去最高だそう。しかしこれは氷山の一角にすぎません。保健室やリソースルームへの登校、オンライン参加や出席と認める学校もあり、それらは含まれていません。いったい子どもたちに何が起きているのでしょうか。それを見るには、大人の社会を見ていく必要があります。

逃げたっていい

24万4940人。もはや見慣れたこの数字は、2021年度の不登校の小中学生の数で、過去最高だそう。しかしこれは氷山の一角にすぎません。保健室やリソースルームへの登校、オンライン参加や出席と認める学校もあり、それらは含まれていません。いったい子どもたちに何が起きているのでしょうか。それを見るには、大人の社会を見ていく必要があります。自己責任社会では、失敗が許されず、誰もが優秀だとアピールし続ける必要があるので、常に緊張を強いられます。起業したり自営業であれば、まさに自己責任で、常にリスクにアンテナを張って生きるようになり、そこから家族や恋人、友だちと過ごす時間や睡眠時間は、リスクに備える時間に簡単にのみ込まれていきました。

「効率化」ではないでしょうか。効率が良いことは常に正しい。この価値観は宗教のようにある時間浸透していき、職場も家庭も変わり続ける社会の中でも揺らぐことのないYMCAの価値を、その時々メッセージとしてお届けします。

「ウォーターセーフティーキャンペーン」水の事故からいのちを守るために



ペットボトルを投げる練習



浮く物を胸の前に持ち「浮いて、待つ」



絡みつく海藻を疑似体験した

山手コミュニティセンターとウエルネス東陽町では6月18日、ウエルネスガーデン品川御殿山では7月2日、「ウォーターセーフティデー」として着衣泳体験会を実施した。合計40組の親子が参加し、水の事故に遭遇した際の行動を体験しながら学んだ。この活動は、かけがえのないいのちを守るために全国のYMCAが実施する「ウォーターセーフティーキャンペーン」の一環である。

体験会は、水の事故に遭わないための約束事を紙芝居で確認した後、プールへ移動して服を着たまま水に入った。全員で作った流れるプールで流れに逆らって移動する困難を体験し、「浮いて、待つ」ための浮き身や水中の人にペットボトルを投げる練習をした。ペットボトルは、中に水を少し入れると投げやすい。荒波や体に絡まる海藻、危険な足場なども疑似体験した。このようなプログラムを体験することは、水の事故防止の意識を高めるだけでなく、いざという時に心理的な動揺を軽減する効果があると言われる。

体験会参加者は大人も子どもも着衣泳未体験者が多く、有意義な機会となったとの声が多かった。「このような講習会を継続してほしい」「頻繁に開催してほしい」との要望が寄せられた。一方で、体験会に参加したほぼ全員がYMCAの水の上安全教育を高く評価しているものの、実際に参加するまではYMCAの取り組みをよく知らなかった人がいることもわかった。水の事故はいつでも、誰にでも起こり得る。いざという時にいのちを守れる人が増えるよう、水上安全についてより広い周知と浸透を目指したい。

「ウォーターセーフティーキャンペーン」では、水上安全の知識をわかりやすく紹介する『ウォーターセーフティーハンドブック』を作成し、各地の教育委員会の後援を受けて広く無料で配布している。ハンドブックはダウンロード可能。まだしばらく暑さが続くこの時期、海や川に出かける機会がある方は、お出かけ前に親子で『ハンドブック』を読んでいただきたい。(広報室)



ウォーターセーフティーハンドブックはこちら

<着衣泳体験会の感想等>

- ・改めて水の危険性を感じた。もっと周りの人にも参加してほしい。
・浮きを使ってバランスを取ることが、思っていたより難しい。
・服を着たままだと思いのほか動きづらく、息苦しくすら感じ、驚いた。
・着衣泳そのものを体験できたことが良かった。特に、親子でというところ。
・いざという時を想像して、危険回避の意識が高まった。
・子どもに水の危険性を理解してもらう良い機会になった。いたずらに怖がるのではなく、危険性を理解した上で楽しく水に親しんでほしい。
・子どもも楽しみながら、波や海中など様々なケースを疑似体験できたことが良かった。
・我が子が溺れている時、いかに冷静に対応するかが大切であると学んだ。

世界YMCA同盟会長が来訪

6月22日、世界YMCA同盟のソヘイラ・ハイエック会長が来訪され、東京YMCAの東陽町地域の事業を視察しました。



ソヘイラ・ハイエック会長(=中央)を囲んで。左から2人目はレベッカ・ワンゴイ園長

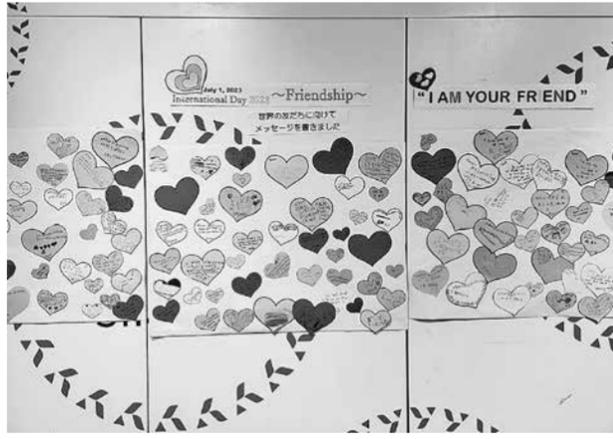
松本数実国際・総合教育事業部統括、キッズガーデン(英語幼児園)のレベッカ・ワンゴイ園長の案内で、インターナショナルスクールの卒業式やキッズガーデンのクラスを見学。子どもたちと、時間をかけて積極的に交流されました。その後、ウエルネス東陽町、にほんご学院、社会体育・保育専門学校も見学されました。世界のYMCAのリーダーである会長は、教育と青少年育成に深い情熱を注いでおられ、子どもたちだけでなく、YMCAが個々のスタッフの成長にどのように貢献しているかなどにも関心を持たれました。対面したスタッフは、大いに刺激を受け、改めてYMCAの使命を心に刻みました。

(広報室)

インターナショナルデーを開催

東陽町語学教育センターでは7月1日、「インターナショナルデー」を開催。国際色豊かなコスチュームを着た55人の子どもたちが、ボランティア「友だち」にメッセージ

を書きました。現在、センターの入口には、すてきな仕上がりとなった全員のメッセージカードが飾られています。お楽しみ会のスナックタイムでは日本、スペイン、イタリア、バングラデシュにちなんだお菓子と4種のフルーツジュースを提供し、子どもたちは初めての味に興味津々の様子でした。最後は、Zoomで台湾、ウクライナ、バングラデシュの各YMCAとつながりました。全員並んで英語で元気よく挨拶し、英語と日本語で練習した歌を披露することができました。たとえ画面越しでも、話す言葉が違っても、気持ちはつながることができている。まさに、このイベントのテーマ「フレンドシップ」を強く感じられた瞬間でした。このようなZoomによる交流は初めての試みでしたが、会場の雰囲気一つとなり、子どもだけでなく保護者にも好評でした。



世界の「友だち」に書いたメッセージ。現在、東陽町語学教育センターの入口に飾られている



お楽しみ会のスナックタイム

保護者向けに設けたバーに会い、多様性を受け入れる心を育む場となるよう、今後もこうした貴重な体験の機会を作っていきたいと思えます。(語学教育 染井光優)



Zoomを利用して台湾、ウクライナ、バングラデシュの各YMCAと交流した



東京YMCA総主事 菅谷 淳

総主事カフェによる。今年2023年は東京YMCAのキャンパスである山中湖センターが開設して100年目にあたります。1923年、当時は砂糖問屋で東京YMCAの理事だった小林彌太郎さんが、青少年の健全な育成のために山中湖畔の土地を寄付して下さったのが始まりです。彼は1906年に米国

コロンビア大学に入学、J. デューイの教育思想である「知育の基礎は実体験にあり」とする経験主義教育を組織キャンパスで実践することを目指しました。あれから100年、何人ものYMCA指導者と若きリーダーが小林さんの理念を引き継ぎ、教えきれないほどの子どもたちの健全な成長のため

に、教育的で組織的なキャンパスを山中湖センターで実践してきました。そして、その子どもたちの中には社会で、いえ世界で活躍している人たちがたくさんいます。彼らの中には「キャンパスは本当に楽しかった」「キャンパスが今の自分を育ててくれた」そう話す人は何人もいます。

100周年を記念して募金活動をすることになりました。古くなったキャンパスを改修し、プログラムのための施設を新設したい、そういう

提案もありましたが、募金の使い途として1番目に採用されたのは「100周年に100人の子どもたちをキャンパスに招待しよう」でした。私はこれを聞いて小林さんが天国で「さすが、YMCAですね」と微笑んでくれているように感じました。

水山中湖センター100周年募金は10月から開始予定。詳細が決まり次第、ホームページや機関紙等でお知らせします。

シリーズ 資料室の窓から<119>

神田会館返還とダーギンさん

本会元副総主事 齊藤 實



占領軍から返還された第二代神田会館(東京キリスト教青年会本館)の石膏模型

1949年6月20日(月)。この日、神田美土代町の会館が占領軍の接収から解除された。接収されていた4年間は占領米国防軍女性将校宿舎であり、化粧品が匂いが強く残るロビーで返還式をおこなった。日本占領中の建物の接収解除を行った第1号だったという。返還にあたってはR・ダーギンさんの陰の力が大きい。ここに掲げたのは返還式当日の写真で、会館模型のすぐ後ろに立つのがダーギンさん。関東大震災の4年前1919年に東京YMCA主事として来日していたダーギンさんは、アジア太平洋戦争によって「敵国人」となり1941年6月に帰米。戦争が終わると、日本占領に当たったG

HQ(連合国軍最高司令官総司令部)最高司令官マッカーサー元帥に請われて「GHQ民間教育局青年部長」となって1945年10月に来日された。しかし、その時も「YMCA人」であり、「YMCA主事としてのつとめ」から離れることはなかった。1946年秋にはGHQ高官のまま東京YMCA新入会員特別講座でYMCA史を講じ、私は受講した。1948年7月になると日本YMCA主事に復帰され、1950年の主事養成講習会で、私はその講義「YMCAの歴史」を再び学ぶ機会を得ている。掲出した神田会館返還記念写真では、ダーギンさんは返還された第二代会館の石膏模型の後ろに立



石膏模型の後ろにダーギンさん。その右は総主事の菅儀一。右から二人目は筆者の齊藤實22歳。

つ。資料室の書類整理が進む中で、最近見つけたのが、「昭和四年二月二十五日付」の請書である。本所区(現墨田区)向島小梅町の高梨三五郎が東京YMCA宛に出したもので、「東京基督教青年会館新築縮尺百分ノ一石膏模型一個。但シ模型窓ハ全部硝子ヲ挿入ノコト此工作費一

に出来上がり納入されたという。いまの物価を当時の5000倍とすると72万円程になるか。資料室では、まだまだ新発見が続く。

神田川船の会を開催

「第87回神田川船の会」が6月10日に開催されました。東京グリーンワイズメンズクラブが後援するこの会は、河川の浄化と護岸の緑化を願いながら川筋に残る江戸文化や町づくりの歴史を紹介する、環境と歴史に着目したクルーズです。

午前と午後に分かれて、約150人が乗船。浅草橋を出発し、グリーンクラブのガイドによる橋の由来などの説明を聞きながら神田川、日本橋川、隅田川に沿って趣ある景色を鑑賞し、小名木川に設置された扇橋閘門の通過を体験した後、隅田川、神田川へ戻りました。扇橋閘門を通過した際は、川のエレベーターのように水位が一気に1.5m上下することに皆さん驚愕していました。

1979年(昭和54年)、「甦れ神田川」を合言葉に、当時異臭を放っていた神田川の清流復活と護岸の緑化・環境整備を願って船を出し、忘れられつつある江戸文化や街づくりの歴史を交えてガイドを行う試みからスタートした「神田川船の会」。下水に関わる技術の向上と関連法の整備等により、1992年からは神田川に鮎の遡上が確認されていますが、まだ道は半ばにしてはるかに遠い状況です。今後も、乗船客に楽しんでもらいながら、環境改善のための情報発信などを続けていきたいと考えています。長年、本活動に多大なご協力をいただいている船宿「三浦屋」さんや関係スタッフの皆さんに深く感謝申し上げます。



扇橋閘門を通過した時の2号船内の様子。左前方に小さく写る船が1号船

(東京グリーンワイズメンズクラブ 目黒 卓)